

第61回名古屋春栄会
演目のあらまし

令和3年1月17日

名古屋春栄会事務局

目 次

翁（おきな）	1
安宅（あたか）	3
花月（かげつ）	4
猩々（しょうじょう）	5
葛城（かずらき）	6
芭蕉（ばしょう）	7
山姥（やまんば）	8
巴（ともえ）	9
六浦（むつら）	10
高砂（たかさご）	11
〔能のミニ知識〕	12

このリーフレットは、第61回名古屋春栄会の演目を解説したものです。

演目の記載順は、番組の順です。

詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穰を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」という2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおわしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

安宅（あたか）

【分類】 四番目物（雑能＝現在物） ＊男舞

【作者】 観世小次郎信光

【主人公】 シテ：武蔵坊弁慶（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（今回の仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

平家討伐に最も勲功のあった源義経も、戦がすむと兄頼朝から追われる身となります。偽山伏に姿をかえ、奥州に落ちのびようとする義経主従を、頼朝は国々に新しく関所を設けて止めようとしています。加賀国（石川県）安宅には、富樫某が下人と共に関を守っています。義経一行は、都を出てやっと安宅に着きますが、関のあることを聞いて、強力〔ごうりき〕に様子を見にやらせると、なかなか用心がきびしいので、義経を強力〔ごうりき〕に仕立て、南都東大寺建立勸進のための一行だといって通ろうとします。しかし関守が全員斬殺するというので、それでは仕方がない討たれようと、殊勝そうに最後の勤行をしますが、山伏を殺せば天罰が当たると威嚇するので、関守は少しひるみ、勸進帳を読めといいます。弁慶がもちあわせた巻物を勸進帳といつわって読み上げ、一度は通過を許されますが、義経の姿を見とがめられ追求を受けます。しかし、弁慶の機転と豪勇で首尾よく、その場を逃れることができます。関を通過して、ほっと一息ついているところへ、先刻の関守が後難を恐れ、非礼を詫びるため酒をもって後を追ひ、一同にふるまいます。酒宴になっても弁慶は油断せず、力強い舞を見せ、関守に暇を告げ、一行に先を急がせます。

【詞章】（今回の仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

鳴るは滝の水。日は照るとも絶えずとうたり絶えずとうたりとくたくて立てや。手束弓の。心許すな関守の人人。暇申してさらばよとて。笈をおっ取り肩にうちかけ。虎の尾を踏み。毒蛇の口を逃れたる心ちして。陸奥の国へぞ。くだりける。

花月（かげつ）

【分類】 四番目物（芸尽物） *羯鼓

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：花月（面・喝食）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

子どもが7歳の時、行方不明になったので、父は僧となり、その子を捜して、九州彦山の麓から出て諸国を廻り、ついに都に着き、清水寺に詣でます。そして、来合わせた門前の男に、何か珍しいものはないかと尋ねると、男は花月という喝食の話をします。まもなく、その花月が現れ、すすめられるままに恋の小歌をうたってたわむれます。そこへ鶯が来て、枝を飛び交い花を散らすので、弓矢で狙いますが、仏の殺生戒を破るまいと思いとどまります。そして、今度は、清水寺の縁起を曲舞で舞って見せます。先ほどから花月の様子を見ていた旅僧は、これこそ行方を尋ねる我が子ではないかと思い、さまざまの質問をし、自分は父だと名乗ります。花月は父との再会を喜び、門前の男の所望にまかせて、羯鼓を打って、天狗にさらわれてからの身の上話を謡います。そして、これからは父と共に仏道修行に出ようと立ち去ってゆきます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

さて京近き山山。さて京近き山山。愛宕の山の太郎坊。比良野の峰の次郎坊。名高き比叡の大岳に。少し心の澄みしこそ。月の横川の流れなれ。日頃はよそにのみ。見てや止みなんと眺めしに。葛城や高天の山。山上大峰釈迦の岳。富士の高嶺に上がりつつ。雲に起き伏す時もあり。かように狂い巡りて。心乱るるこのささら。さらさらさらさらと。摩っては歌い舞うては数え。山山峰峰。里里を。めぐり廻ればあの僧に。逢い奉る嬉しさよ。今よりこのささら。さつと捨ててさ候はば。あれなる御僧に。連れ参らせて仏道。連れ参らせて。仏道の修行に。出ざるぞ嬉しかりける。出ざるぞ嬉しかりける。

猩々（しょうじょう）

【分類】五番目物（祝言物） *中ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰って行きました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変らぬ。秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ。足元はよろよろと。酔いに伏したる枕の夢の。覚むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

葛城（かずらき）

【分類】 三番目物（鬘物） *序ノ舞

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：里女（面・増女）、 後シテ：葛城の明神（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

出羽国（山形県）の羽黒山から出た山伏が、大和国（奈良県）の葛城山へとやって来ます。折しも降りしきる雪に悩んでいると、一人の里女が現れ、彼女の庵に案内し、焚火をしてもてなしてくれます。そして、雪の中で集めて束にした木々の細枝を標〔しもと〕と呼ぶのだといい、「標結ふ葛城山に降る雪の、問なく時なく思ほゆるかな」という古歌もあると教えてくれます。山伏は好意を謝し、やがて後夜の勤行を始めようとする、女は、お勤めのついでに加持祈祷をして、自分の三熱〔さんねつ〕の苦しみを助けて下さいと頼みます。山伏は不審に思っ、その素性を尋ねると、自分は葛城の神であるが、昔、役〔えん〕ノ行者に命ぜられた岩橋を架けなかったため、不動明王の索に縛られ苦しんでいるとって消え失せます。

<中入>

そこへ麓の男がやって来たので、葛城山の岩橋の故事について尋ねます。その話を聞き、先程の女の事など思いあわせ、奇なことと思ひ、夜もすがら女神のために祈ります。すると、その修法にひかれて、葛城の神が現れ、三熱の苦を免れた喜びを述べ大和舞を舞い、明け方近くなると、岩戸の内へ姿を隠します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

高天の原の岩戸の舞。高天の原の岩戸の舞。天の香久山も向いに見えたり。月白く雪白く。いずれも白妙の。景色なれども。名に負う葛城の。神の顔かたち。面なや面はゆや。恥かしやあさましや。あさまにもなりぬべき。明けぬ先にと葛城の。明けぬ先にと葛城の夜の。岩戸にぞ入り給う。岩戸の内にぞ入り給う。

芭蕉（ばしょう）

【分類】三番目物（鬘物＝精天仙物） *序ノ舞

【主人公】前シテ：女（面・曲見または小面）、後シテ：芭蕉の精（面・同じ）

【作者】金春禅竹

【あらすじ】（今回の仕舞[キリ]の部分…下線部）

楚国（中国）の小水という所の山中に住んで修行する僧が、夜読経する時に庵室のあたりで人の気配がするので、今夜は名を尋ねようと思い、読経を始めると、女が月下に現れ、仏法結縁のために庵をお借りしたいと言います。女は女人成仏、草木成仏の功德を語り、僧は薬草喩品を読誦します。女は自分が芭蕉の精であることをほのめかして去っていきます。

<中入>

僧は土地の者から、鹿を射て芭蕉で覆い隠したが、その場所を忘れてしまい夢と違って諦めたという芭蕉の故事を聞きます。僧が先ほどの女の話をする、土地の者は法華経の読誦を勧めます。僧が月の光の下、読経をしていると芭蕉の精が現れて、女体に化身していることを不審に思い尋ねる僧に芭蕉の精が女体である謂れを話します。芭蕉の精は非情草木の成仏を説き、諸法実相を詠嘆して舞を舞います。そして、風の前の芭蕉の姿を見せたと思うと、夢のように消えてしまいました。

【詞章】（今回の仕舞[キリ]の部分の抜粋）

霜の経。露の緯こそ。弱からし。草の袂は。久方の。久方の。天つ乙女の羽衣なれや。これも芭蕉の葉袖をかえし。かえす袂も芭蕉の扇の風ぼうぼうとものすごき古寺の。庭の浅茅生女郎花刈萱。面影うつろ露の間に。山おろし松の風。吹き払い吹き払い。花も千草も。ちりぢりに。花も千草も。ちりぢりになれば。芭蕉は破れて残りけり。

山姥（やまんば）

【分類】 四・五番目物（略脇能物＝妖怪物） ＊カケリ

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：山の女（面・曲見）、後シテ：鬼女（面・山姥）

【あらすじ】（今回の仕舞の部分…下線部）

京都に、山姥の山巡りの曲舞を得意としたので、百万山姥と仇名されていた遊女がありました。彼女は、善光寺参詣を思い立ち、従者をつれて旅に出ます。途中、越中国（富山県）・越後国（新潟県）の国境の境川まで来ます。従者は里の男を呼び出し、善光寺への道を尋ねると、男は三つの道があるが、そのうち最も険難ではあるが、阿弥陀如来が通られたという上路越をすすめ、自分が道案内をしようと言います。遊女も乗り物を捨て、徒歩で後について行きます。しばらく進むと、にわかにあたりが暗くなり、一行は当惑します。すると、一人の女が現れ、宿を貸そうといい、自分の庵へと案内します。そしてその女は、山姥の歌を聞かせてほしいと頼みます。遊女の事や山姥の曲舞の事をよく知っているので、一行の者が不思議に思っ、名を尋ねると、自分こそ山姥であると明かし、夜更けてから歌ってくれたら、もう一度姿を現して、歌に合わせて舞おうと告げて消え失せます。

<中入>

里の男は、従者に問われるまま、山姥の素性について、いろいろ物語ります。やがて夜も更けたので、遊女が笛を吹いて待ち受けると、山姥が怪異な姿で現われます。山姥に促されて、遊女は恐れながら謡い始めると山姥もそれに合わせて舞います。そして深山の光景、山姥の境涯を物語り、さらに春夏秋冬に、花月雪をたずねて山巡りする様を見せた後、いずくともなく去っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

暇申して帰る山の。春は梢に咲くかと待ちし。花を尋ねて山めぐり。秋はきやけき影を尋ねて。月見る方にと山めぐり。冬は冴えゆく時雨の雲の。雪をさそいて山めぐり。めぐりめぐりて輪廻を離れぬ妄執の雲の。塵積もって。山姥となれる。鬼女が有様見るや見るやと。峰にかけり。谷に響きて今までここに。あるよと見えしが山また山に。山めぐり。山また山に。山めぐりして。行方も知らず。なりにけり。

巴（ともえ）

【分類】二番目物（修羅物）

【作者】不詳

【主人公】前シテ：里女（面・小面）、後シテ：巴御前の霊（面・増女）

【あらすじ】（連吟の部分…下線部）

木曾の山里の僧が、都へ上る途中、近江国（滋賀県）粟津の原までやって来ます。そこへ一人の里女が現れ、とある松の木陰の社に参拝しながら涙を流しています。不審に思った僧が言葉をかけると、女は、行教和尚も宇佐八幡へ詣でられた時、「何ごとの おはしますとは 知らねども かたじけなさに 涙こぼるる」と詠まれたように、神社の前で涙を流すことは不思議ではないといい、ここはあなたと故郷が同じ木曾義仲が神として祀られているところであるから、その霊を慰めてほしいと頼みます。そして実は自分も亡者であると言い残して、夕暮れの草陰に隠れてしまいます。

<中入>

旅僧は、里の男に、義仲の最後と巴御前のことを詳しく聞き、同国の縁と思い、一夜をここで明かすべく読経し、亡き人の跡を弔います。すると先刻の女が、長刀を持ち甲冑姿で現れ、自分は巴という女武者であると名乗ります。そして、義仲の討死の様と、その時の自分の奮戦ぶりを物語ります。しかし、義仲の遺言により一緒に死ぬことが許されず、形見の品をもって一人落ちのびたが、心残りが成仏のさまたげになっているので、その執心をはらしてほしいと回向を願って消え失せます。

【詞章】（連吟の部分の抜粋）

かくて御前を立ち上がり。見れば敵の大勢。あれは巴か女武者。あますなもらすなと。敵てしげくかかれば。今は引くとものがるまじ。いで一戦〔ひといく〕き嬉しやと。巴すこしもさわがず。わざと敵を近くなさんと。長刀ひきそばめ。少しおそるるけしきなれば。敵はえたりと切つてかかれば。長刀柄長くおつとりのべて。四方へまくる八方拂い。一所にあたる木の葉がえし。嵐も落つるや花の瀧波。まくらをたたんで戦いければ。皆一方にきり立てられて。あともはるかに見えざりけり。

六浦（むつら）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作 者】金春禅竹（?）

【主人公】前シテ：里女（面：小面）、後シテ：楓の精（面：小面）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

都の僧が東国行脚の途中、相模国（神奈川県）六浦の称名寺に立ち寄ると、折りしも山々の木々が今を盛りと紅葉しているのに、この寺の一本の楓だけが少しも紅葉していないので、不審を思ってみていると、ひとりの里の女が現れます。女は、昔、鎌倉中納言為相卿がこの寺に来た時、この木だけが山々に先立って紅葉しているのを見て、和歌を一首詠じたところ、この木は喜び、功成り名を遂げた上は身を退くのが天の道と信じて、それ以来常緑樹のようになったのです、実は私は楓の精であると言って秋草の中に消え失せます。

<中入>

その夜、僧がここで過ごしていると、楓の精が現れて、草木も成仏できる仏徳を称えて舞をまいますが、明け方になると影の如く消えてしまいました。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

秋の夜の。千夜を一夜に。重ねても。言葉残りて。鳥や鳴かまし。八声の鳥も数数に。八声の鳥も数数に。鐘も聞こゆる。明け方の空の。所は六浦の浦風山風。吹きしおり吹きしおり。散るもみじ葉の。月に照り添いて。からくれないの庭の面。明けなば恥かし。暇申して帰る山路に。行くかと思えば木の間の月の。行くかと思えば木の間の月の。かげろう姿と。なりにけり。

高砂（たかさご）

【分類】初番目物（脇能＝男神物） *神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいただき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声を楽しむ。さっさっの声を楽しむ。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>